



飲み、かつ語る著者(撮影・長沢 洋)

学者でもない私が、なぜ南極に行くことになったのかということでも話しましょうか。

現在上映中かどうかわかりませんが、先日、私はシヤクルトン(1874〜1922)の映画を見ました。品川プリンスホテル新館6

旧師によって擦り込まれた私の南極人生

村山 雅美

Fの映画館で、200席くらいのお客は8人しかいなかった。シヤクルトンが南極で映画を撮ったのは1915年、それを検証するために今世紀になって、最新装備をつけた超一流登山家3人が最新の登山技術と装備で彼の足跡をたどったのです。昔のフィルムと今のビデオとどこでつないだかわからないくらいよくできた映画でした。その中で、シヤクルトンらが山を越えるところがある。リッジからの下りは尻で滑って下りてくるんです。それが今では一流の登山家が苦勞して登り下りして

いる。その違いがどこからくるかといえ、それこそ地球の温暖化ですよ。

1915年、南極を目指したシヤクルトン隊は流水のために船(エンデュアランス号)を押し潰されてしまふ。隊長以下28人は氷の上を歩くよりなかった。このままでは全員が死んでしまうと、ボートでやつとたどり着いたのはエレファント島。シヤクルトンが隊員5人を連れて1300^キ離れたサウス・ジョージア島に向かつて漕ぎ出します。島の西岸に着いたシヤクルトンは高い峠を越えて捕鯨基地のある東岸へと救援を求めて行く。南極探検史に残る有名な事件ですが、この時、エレファント島に残った隊員の中にはオードリーズという人がいたのです。

先生は生徒たちを順番に自分のアパートへよんでくれるんです。お茶の水、今の順天堂大学病院の敷地が文化アパートといって、当時の日本では初めての本格的なアパートメントでした。そこへ2、3人ずつよんでくれた。招待するつたて酒を飲ませるわけじゃない(笑)、お茶とお菓子を出し



2003 年 (平成 15 年)
7 月号 (No. 698)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-info@jac.or.jp

目 次

旧師によって擦り込まれた私の南極人生……………	1
報告……………	4
図書・第31回山岳史懇談会・対山館と百瀬慎太郎／自然保護・「国際山岳自然環境集会2003」／科学・講演「中央構造線に沿う塩の道を探る」／三水会・韓国シリーズ第6回／山の自然学・「海上の森」	
さんけん通信……………	7
支部だより……………	8
東九州／秋田／信濃／岐阜	
東西南北……………	12
日本山岳会100周年への夢／海外登山基金助成の審査経過の公開を望む／国際登山者会議の「チロル宣言」はおかしい／シュラギントワイトの本／ハリッシュ・カパディア氏 RGS ゴールドメダル授賞／京都支部恒例納涼ビールパーティー	
Climbing & Medicine……………	23
海外の山……………	17
図書紹介……………	18
図書受入報告・新入会員……………	19
会務報告……………	20
INFORMATION……………	22
ルーム日誌……………	23

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木…………… 10~20時
水・金…………… 13~20時
第2、第4土曜日…………… 閉室
第1、第3、第5土曜日…………… 10~18時
ルーム夏期休室日…………… 8月9~16日

てくれるんです。そして必ずおみやげをくださる。私がいたいたのは意味不明のものふたつだったんですが、ひとつは懐中時計の長い針、ひとつは時計のガラスのかけら。それらを箱に入れて紙に包んでプレゼントしてくれたんです。次に会った時に「どういう意味ですか」と聞いたら、先生が言うには「お前は山が好きらしいから、遭難したらこのガラスを反射させて助けを求めろ。もし助けが来なかったら、沢へ下りてこの針で魚を釣れ」と。こう教えてくれた人が、後年わかった南極の勇士オードリーズ隊員だったんです。

南極から帰ったシャクルトン、海軍士官として第一次大戦に参加する。オードリーズも同じく海軍に入る。戦争が終わると軍人は要らないから世界中へ派遣されたようです。

大戦後日本は空母「鳳翔」を建造しますが、運用の知識が乏しかったため、イギリスからセンビル大佐を団長とする教導団が来日する。オードリーズ少佐もそのメンバーのひとりだったのです。

あの映画の大筋は、シャクルトンの記録とともにオードリーズの

日記によるということだった。几帳面な人で、十何人かの隊員が8か月も越冬して誰ひとりとして餓死はおろか、凍傷にもならなかったのは、彼のストックキーパーの才覚によるものと言いますね。シャクルトンは本の中でオードリーズのことをけちん坊だと書いていますが、けちん坊だからこそ、乏しい食糧を長くもたせ、隊員の志気を保つことができたんです。

考えてみると、中学生になったばかりの時、オードリーズ先生に出会ったことで、知らず知らずに私の脳みそに南極が擦り込まれたのでしょうね。今でもすごい人に擦り込まれたと思います。

■オードリーズとモリス

ここで、なぜオードリーズ先生に巡り会えたのか推測してみましよう。

当時、高等師範の英語教授にC・J・モリス先生がいました。モリス？ 知る人ぞ知る1922年、ブルースのエヴェレスト隊員です。なぜ高師に来たかは不明ですが、その付属中学には、全国に先駆けて山岳部を作った中学というので、「エヴェレストテント」

と称するヒマラヤで使ったという天幕を寄贈してくださいました。私たちは「部室」として扱い、子ども心にもヒマラヤの空気に触れる気持で、夏、冬の虫干しを兼ねたキャンプを楽しみにしていました。キャンプの夜、先輩の長谷川伝次郎の『ヒマラヤ写真図鑑』を見たり『アルパインジャーナル』を上級生から読み聞かせられたりしたものです。

そんな中学にはもってこいの先生だと、モリスが旧友のオードリーズを推薦されたと信じています。

■運が良かった海軍時代

高校・大学と山に明け暮れていた間に、第二次世界大戦が勃発。

卒業繰り上げという異例の事態に直面することになった。このままでは陸軍に召集されるが、海軍なら少しはメシがうまいんじゃないかと思つて海軍を希望した。

成績のいいのは大歓迎、少々悪くても陸軍に持つていかれるよりはと、新しく海軍予備学生制度を作つて、そこへ入れてくれた。4つ種目があつて、陸戦隊がひとつ、空襲を防ぐ防空がふたつめ、3番目は機雷・魚雷、最後に通信です。

これにもふたつあつて、内地で敵の通信を傍受して敵情を探る仕事と、僕が選んだ軍艦に乗つてトンツーとやる係とあつた。

戦艦「長門」航空母艦「瑞鶴」の乗組にもなりましたが、幸運にも「長門」「瑞鶴」という名艦に乗りながら一度も戦闘に参加することなく、戦争後半は内地勤務で敗戦となりました。

毎日戦況不利の暗号電報に取り組みながら、暗号書の照合と称して、連合艦隊の旗艦「武蔵」行の用件をつくり、仲間と冷房がきいた食堂でビールを飲んだものです。戦艦「武蔵」の前楼マストのラツタルの昇り降りに奥又白のバツトレスの登攀を思い出していました。

■マナスルから南極へ

昭和20年、戦争が終わると、横浜の商社に身を置きました。そのうちに1952年秋、日本山岳会がマナスル踏査隊を送り出すことになつて、私もその準備を手伝つた。その年の暮、彼らが持ち帰ったマナスル氷河の写真を見て、ヒマラヤが突然近づいてきました。

1953年、第一次マナスル登山隊の先発隊として日本を立ちま



極点まで30kmの著者
『南極点への道』(朝日新聞社刊)より

した。この時は7750円で敗退。翌54年には山麓のサマで住民との間に騒動が起きて、これも失敗。

1955年秋に事件は解決したとはいうが、現場で確認するために小原勝郎、橋本誠二さんと行き、56年の第3次の時には降りました。

1955年の暮にマナスルから帰った僕は、西堀先生によばれて学士会館へ行った。ヒマラヤ登山のキャンプで聞いていた地球観測年の南極観測に、日本も名乗りをあげたと言うんです。勸進元の学術会議は日本山岳会に諮問し、隊長が永田武先生で西堀栄三郎先生が設営担当の副隊長に決まっていたのですが、僕は何も知らなかった。西堀さんから「俺が副隊長やからお前来てくれ」と言われて隊長は誰ですか」と聞いたたら「永田はんいうてエライ人や」と言うだけ。「飛んで火に入る夏の虫や」と、うまいことまるめられて南極

と、いくことになりました。

何で僕に話が来たのか。後から聞いたところでは、学者の間に学閥のほかに岳閥があつて、設営を取り仕切る山屋をどこにするかもめていたようです。京大の今西錦司さん、北大の木原均さん、東大の今井田研二郎さんが集まって、設営要員に「どんな手持ちがあるかいな」とカードを出し合ったんだそうです。座長の今西さんが持札を見て「南極はやつぱり海軍さんの仕事や」と言つて陸軍勢の多かった京都大学はあつさり抜けてしまった。僕が海軍だったため、「お前が西堀を助けるために渡辺兵力さんと一緒にやれ」ということになったんです。

行くにあたって、当時僕は社員だったし、マナスルに3年続けて行った後ろめたさもあります。

それを言うと西堀さんは「まかしとき」と言つて、文部省にかけあつて僕に横浜国立大学に職を見つけてくれた。つまり南極への指定席ができたわけです。

日本の南極探検では、白瀬中尉の前例がある。しかしその時は全く個人的な事業として扱われて、日本政府は何の支援もしなかった。大隈重信が後援会長になつて民間で送り出したのです。南極に「大和雪原」の宣言はしましたが、白瀬中尉は莫大な負債を背負つて、不幸な晩年を送られました。以上が僕の南極人生の始まりです。

■最後に一言

僕に南極を擦り込んでくれたオードリーズ先生は、温泉と雪の日本にほれ込んだのでしよう、付属に3年、旧制の弘前・山形高校で温泉と雪を、小田原生まれの日本人の奥様と楽しんでる間に世間はきな臭くなりました。俄然、ジョンブル魂が騒ぎ、旧友の香港提督に空軍か陸戦隊への召集を懇願したが、「君の心意気には感服するが、63歳では無理だ、対戦に備えて語学将校の養成を頼むよ」と、心ならずも熱愛した日本をあとに

奥様、お嬢様ともどもニュージーランドに渡つたのは満州事変の頃でした。

それから半世紀たつて、僕はニュージーランド南極倶楽部に招かれました。

「僕はあのオードリーズの教え子です」と自己紹介すると、居並ぶ南極男女は歓声をあげました。彼の国はシヤクルトンの勇士として、日本の白瀬探検隊に対するものには格段の尊敬を捧げるお国柄です。倶楽部は早速ご遺族に連絡をとつてくれ、一人娘と住む未亡人を訪ねることになりました。

「50年前の付属の生徒です。先生の南極から帰つたばかりです」と挨拶もそこそこに奥様の記憶は明晰、羽織袴の新郎に寄り添う結婚写真に始まる思い出は尽きませんでした。先生のアイルランド人特有のウィットとユーモアに溢れた人柄は終生変わらなかったようです。

「お庭にあなたのために世界地図の花壇をつくつてくださったの覚えてる？」と語り合う先生のご遺族でした。

(4月7日緑爽会講演記録をもとに補筆)

報告

REPORT
7月

図書委員会

第31回山岳史懇談会
對山館と百瀬慎太郎

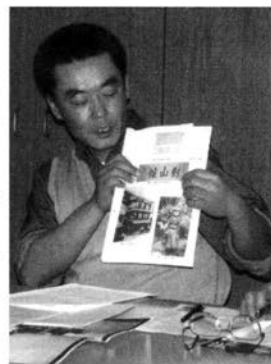
昨年10・12月、大町市立山岳博物館で表記の企画展が開催され、好評を博した。これを機会に3月25日、本会ルームに同館学芸員の峯村隆氏をお迎えして、日本登山史の一時代を飾る町・宿・人について語っていただき、36名の参加者とともに懇談した。

大町宿は昔から千国街道、善光寺・戸隠道、越中を結ぶ針ノ木峠越えの道の交差点として、北アルプス周辺地域の東西南北を結ぶ要衝だった。ここに江戸時代から今(ヤマチヨウ)という屋号で「問屋取次業」を営んでいたとされるのが百瀬家である。明治20年代前半に旅館業に転業、同26年にはウ

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

エストンが宿泊している。以来、日本近代登山黎明期に活躍した人びとの定宿となった。これが「對山館」だが、不思議なことにこの館名の由来が判然とせず、それを探った峯村氏の話は、当時の大町の文化的雰囲気を行拂させて興味深い。

明治25年生まれの百瀬慎太郎は對山館とともに育ち、同館経営、大町登山案内者組合結成、大沢・針ノ木小屋創設と、登山史の裏方として大きな業績を残したが、自らも登山家だった。そして江戸時代に培われた地方都市の素封家の伝統的教養、明治以降の近代思潮の素養、一流の文化人だった近代登山の担い手との交誼が、慎太郎の人物像をきわめて奥深いものになっている。それを具現した對山館の歴史を、峯村氏は数々のエピソードを紹介しながら語り、興味の



對山館の歴史を語る峯村隆氏

尽きない講演となった。

そのあと慎太郎の孫にあたる井垣真理氏をまじえて賑やかな懇談に移った。戦時下の昭和18年に閉館する前の對山館に泊まった長老の回想なども披露され、春雨の一夜は意義深く過ぎていった。

なお大町市は昨年「山岳文化都市宣言」を行った。交通の発達とともに「通り過ぎる点」になってしまった大町の登山文化の再生に、会員諸氏の知恵を結集して、歴史の恩返しができると思う。

(平井 吉夫)

自然保護委員会

「国際山岳自然環境集会
2003」開催

4月12日、本邦初の「国際山岳自然環境集会」が、四ッ谷・雙葉学園同窓会館において開催された。

主催団体の山岳団体自然環境連絡会は、昨年の「国際山岳年」イベントを協力して行うために組織された連絡会である。加盟団体は、日本山岳会、日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト、日本ヒマラヤ協会、東京都山岳連盟、日本トイレ協会の7団体である。企画段階では予想もなかったアメリカのイラク侵攻、さらにはSARS問題の発生で予定されていた国々が参加できなくなったことは残念であった。とはいえ、UIAA(国際山岳連盟)自然保護副委員長・スイス山岳会自然保護委員長ユルク・マイヤー氏はじめ韓国、台湾から6名の参加者を迎えることができた。

午前中の第1部は、「今、アジアでどのような山岳自然環境活動が行われているか」をテーマに、山岳団体自然保護関係者による円卓会議。JACC大蔵喜福氏による基調トークを皮切りに、韓国国立公園環境保全所長・権炳和氏「韓国の国立公園の現状と政策」、中華台北山岳会・呉致呈氏「台湾の山と自然環境」、中華山岳協会張王龍氏「台湾の国立公園政策」そし



UIAA山岳保護副委員長ユルク・マイヤー氏

てユルク・マイヤー氏「UIAAにおける国際山岳年への各国の活動」の各報告。続いて「アジアにおけるこれからの自然環境活動」をテーマに韓国、台湾そして日本側から労山、HATJ、都岳連のパネリストによる討論が行われた。

韓国の国立公園は「利用から保全へ」、そして破壊復元のための3年程度の利用休止、入山禁止、あるいは罰金の徴収等の施策を積極的に推進していることが報告された。一方台湾は、諸施策を遂行しつつもなるべく規制をせず自由に山を楽しむことを基調とするとの発言が印象的であった。

午後の第2部「世界における山岳自然環境活動」は、一般の参加者を対象に公開シンポジウム。まず、田部井淳子氏によるゲストスピーチ。

ユルク・マイヤー氏の講演「日本およびアジアの山岳団体への自然環境についての提案」UIAAの山岳保護委員会は、欧州各地で山岳地帯でのケープルカー建設反対運動を行い、さらには各国の加盟団体が自然破壊、乱開発防止の活動を行ってきた。スイスの山岳会は、多くの会員を有し山小屋も所有、自然保護活動は国立公園管理にまで及んでいる。山岳ガイドに対しても2日間の環境教育プログラムを実施している。山岳会は単なる登山の団体ではなく、積極的に山の自然保護に取り組むべきである。

次いでトークショーとして、大蔵喜福氏「世界から見た日本の山岳自然保護」、韓国山岳会副会長・崔宣雄氏「韓国の山岳自然環境の現状と取り組み方」、HATJ理事長・神崎忠男氏「国際山岳連盟、アジア山岳連盟に期待したい環境活動」の報告があった。最後に、パネルディスカッション

「みんなで語り合おうこれからの自然保護を」。JAC篠崎をコーディネーターとして、ユルク・マイヤー氏、権柄和氏、呉致呈氏、大蔵喜福氏をパネリストとして活発な討議が行われた。会場からも熱心な質問があり時間の関係ですべてに答えることができないまま、盛況裡に会を終えることができた。山岳7団体の自然保護関係者が横断的組織をつくり、力を合わせて山の自然保護国際集会を開催するのは初めてのことであり、その意義は大きいものがあると考えられる。翌13日は自然保護委員会「高尾の森づくり」第3回植樹祭が開催され、ユルク・マイヤー氏ほか台湾の方々に参加を得て、こちらも国際的なイベントとすることができた。(篠崎 仁)

科学委員会

講演会「中央構造線に沿う塩の道を探る」

日本全国に名残りを留めている塩の道であるが、本州の中部を南北に走る糸魚川・静岡構造線に沿う道のうち、昨年は北側の千国街道、続いて今年は南側の秋葉街道

を中心とした探索山行を企画し、その予備学習会を5月15日、ルウムで開催した。講師の稲垣敏彦・塩の道研究会代表は、秋葉道南端の静岡県相良から糸魚川に至る、全長350kmを、掛川歩こう会の方々とともに、すでに四回踏破された方である。

古い道は、町道や県道、国道開発のためズタズタにされている。そのかつての道を地図と磁石を手に、探し、辿り、繋いで歩かれた体験から、講演は具体的な事例に富んでいた。例えば、牛馬の通った道には、必ずオオバコ、牛馬の

ドラマチックな登山史の舞台。威風堂々たる山に迫る。

ナンガパルバット・メルヘンの草原 トレッキング 8日間

〈成田発着〉9/12●9/19●10/10●10/17発
248,000円～252,000円

〈成田発着〉K2・バルトロ氷河トレッキング25日間
9月12日(金)～10月6日(月) 558,000円



国土交通大臣登録旅行業第490号/出日本旅行業協会正会員 ①ボンド保証会員
アルパイン ツア サービス 株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557

e-mail: info@alpine-ts.co.jp http://www.alpine-tour.com

好むコマクサが生えており、道に沿ってないところには生えていないこと、これは人のワラジや牛馬の足に付いて種子の運ばれた道があった証である。最初は峰道であつたろうが、峰道ばかりでは水場がない。現実には古道は水際には下りず、峰にも近づくず、水場がところどころに現れる山の中腹についていることなど、生活に不可欠な塩の道、物産の交易路ならではの様態を興味深く伺った。

時代とともに道は発展する。面白いことに、現在、峰道、人馬の道、荷車の道（江戸）、車道（昭和）、天竜川沿いの国道と、五本の道が見られる地域もある。ごく一部を除き昔の道がほぼ復元できたようであり、5年前に立札「秋葉道・塩の道」が438枚も建てられた。ついで静岡新聞社から出版された「塩の道ウォーキング」には、2万5千分の1地図上に、静岡県境を北に越えて南信濃に至る約130kmの行程が記入されている。猪や野猿出没のこと、杉林では山蛭に注意など、実際の助言もいただいた。

この道は、かつて修験者や信仰厚き人々が火防の霊場秋葉山を目

指した街道でもある。数々の史跡もあり、今になお素朴な祭が残っているなど、民族的にも面白い道であるが、今年南側を歩くことで、北側との比較もできるというもの。北には牛方宿、南は馬宿、これは牛の方が急坂に強いということか、興味あるテーマの見出せる道ではある。昨年の井上講師のお話と併せて、聴講者一同、今に生きる塩の道という思いを強くしたのであった。（福山 美知子）

三水会

韓国シリーズ第6回 月岳山・道峰山

5月18日、仁川空港12時40分到着。日本人11名、韓国人2名計13名でチャーターした大型バスに乗り、忠清北道の丹陽へ。ここは忠州湖観光の丹陽八景で有名な地である。韓国は高速道が発達しているから丹陽着が早く、夕食前に船で忠州湖を遊覧し、景色を満喫した。コンドミニアムに宿泊。

19日、湖畔の店で店主が採ってきた山菜などで朝食、バスで月岳山の登山口、松界里へ行く。月岳山の案内板の横に、ハングルで慈



6回目を迎えた韓国登山に参加した11名

光寺と彫り込んだ岩がある。国立公園の料金所で入山料を払い、尼寺にそって坂道を上る。低木の林の中を歩き、傾斜のある石畳の階段を上る。

風もなく、快適な登山日和であるが、かなりの急登もあつた。2時間ほどで縦寺路に出た。標高830m。山頂に近くなると急傾斜の下りがあり、山頂部の大岩壁が近くなる。鉄製の階段と橋を上り、月岳山の山頂（1094m）に出た。360度の展望、山々ばかりでなく、湖もよく見える。

下山は往路を戻り、どんどん下りると磨崖仏が10mほどの規模で刻まれている。3時間ほどで徳周寺に下山した。再びバスに乗り、

水安温泉（スアンボン）のホテルへ。20日、ゆつくり出発して一路ソウルへ。明洞（ミョンドン）のホテルに行き、夕食は海鮮料理にした。

21日、明洞から地下鉄4号線のタンコゲ行きに乗り、倉洞（サングド）で下車。換え、京元線の道峰山駅で下車。バスターミナルに行くと、中高年のハイカーが続々とやって来る。黒の上下のユニフォームで、ぴしっときめた女性のグループも多い。土日の高尾山並の混みかたである。旺盛な登山意欲がすごい。

国立公園の料金所で入山料を払い、岩盤の道を道峰山（ダボクサン）へ上る。ここで左折し、天竺寺（テンヂクサ）を経て、万丈峰（マンジャンボン）横を抜け、紫雲峰（チユンボン）の稜線に出た。ここから右へ行けば砲台稜線だが、左へ行き、岩稜を上り、岩稜を下るルートを取り、中峰（チュンボン）で下山にかり、金剛庵（クムガンアム）の前に出て、元の登山道に戻る。天気にも恵まれ、展望を楽しんだ。

夜は武橋洞（ムギョウドン）の韓国最高の焼肉店で打ち上げをやり、韓国の2人の方に感謝を申し上げた。

今回の山行での花は、石井由紀さんによると、オオヤマレンゲ、ハクセン、クロフネツツジをはじめ、35種があつたそうだ。

22日、仁川空港発18時30分で成田空港に帰国して解散。

(中澤・石田 稔)

山の自然学研究会

東海地方独特の自然

「海上の森」を歩く

5月末の季節外れの台風4号は28年ぶりで四国に上陸し、中国地方に再上陸するという荒れ模様の天候であったが11名が参加した。

ここは2005年の日本国際博覧会の開催予定地であったが規模が縮小された結果、ほぼ全域が開発を免れて、里山が残った場所である。しかし、里山は荒れているように見えた。この海上の森の里では農林業をやる人が減っているのではないだろうか。

各自然保護団体が、努力の結果、日本国際博覧会会場は縮小されたのは大変結構だが、海上の森の里の昔からの田畑が、ネザサ等で全体がだめになっているのも林道脇の田畑に見られた。

さて、海上の森の周辺地域は花崗岩が広く分布していて、約9000万年前、地下30〜40^キという深いところにマグマが入り込んで

ゆっくり固まり、後の地殻変動で持ち上げられ、現在の地表は花崗岩として表に出たものだ。

地域の猿投山の東に、大きな活断層が走っている。海上の森はその西南部に位置する。前述の花崗岩の上に新生代の約100万年前の土岐砂礫層が猿投山山塊を取り巻いている。海上の里には分岐断層があり花崗岩と砂礫層を分けている。東西方向に地層断面をみると、海上の森は主に砂礫層である。

以上のような、地質や環境のもとの独特の動植物が生息している場所であり、これらの里山を子々孫々に残していく必要があると思った。

第1日目 5月31日(土)(曇り)

愛知環状鉄道山口駅—矢田川四ツ沢—大正池—物見山—四ツ沢
第2日目 6月1日(日)(小雨)

矢田川四ツ沢—篠田池—海上の里—多度神社—四ツ沢—旧銭屋銅産跡地横—山口駅(13時20分解散)
観察された動植物は数十種余に上った。さて、日本列島では海上の森にしかないという、日本海が出来る前の3000万年前から生育しているモンゴリナラ(ブナ科)を確認し解散となった。

(堀内 弘栄)

さんけん通信

上高地の門限

管理人 木村太郎・弥生

今年もまた、上高地・山研での生活が始まりました。

閉所後の半年を東京で過ごしていた私たちにとって、久しぶりの上高地での生活は新鮮に感じられることがいっぱい。そのひとつに門限！

みなさんご存知のようにこ

こではマイカー対象に通年の通行規制があり、そのために玄関口である釜トンネルのゲート(関所?)は、詰所の方が帰ってしまう午後7時から翌朝の5時までには閉められてしまいます。鍵は詰所にいる係員しか原則として持っていないために、ゲートが閉められてしまえば、上高地の住人といえども「松本まで飲みに下りる」ということもできず、反対に松本から上高地に入ることができないという状況になってしまうのです。

上高地とはそんなところで、すから夕暮れ時に松本—上高地の158号線の道路がちょっ

と混んでいたり、ノロノロ運転のトラックなどの後ろについてしまった時などは、みんな「門限に間に合わなくなるのでは」とヒヤヒヤです。

上高地で働く知り合いの多くは、そんな万が一のために「お泊まりセット」を車に積んでいるようです。車中でも眠れるようにシュラフや歯ブラシ、温泉道具まで揃えている人もいます。

これから北アルプスも本格的な夏山シーズンを迎えます。夕暮れどきにハラハラドキドキしながら、観光バスの後ろを走る地元の車が多くなる季節でもあります。

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

東九州支部

平成15年度定期総会

支部総会を4月19日17時より九重ハイランドホテルにて開催。出席23名、委任状74名(会友含む)、広い会議室に支部長の挨拶が響く。「国際山岳年青年体験登山、月例山行」人声のしないところ「九州5支部集会、全国集会などに参加した。今年も会員の親睦を深め歴史ある会の100周年へ向かい足跡を残す心構えで日々を送ろう」続いて議長選出。平成14年度事業報告、決算報告、拍手で一括承認。平成15年度案も承認され、100周年の募金についての説明と、「大分百山」の販売協力があつた。



支部総会、ビデオ上映、懇親会と続き、翌日は小倉岳に登った。

役員改選では、梅木支部長留任。懇親会は、昨年6月6日急逝した故大木淳氏を偲び黙祷、乾杯、歌、雑談、ご機嫌な顔。

20日7時半朝食、有志は梅木支部長の勧めたピークをめざす。雨、風の中、視界なし。牧場の柵を越え牧草の中のジグザグを3回で三等三角点。山頂は698日平山。小雨になりすぐに車止めが見える。登り20分である。10分でふたつめ小倉岳登山口着。植林の中にアンテナだけが見える。青空だ。故今西錦司元会長来分の折り「いい姿の山だ」と京都弁で山名を聞いた。

かれた時は、玖珠より湯布院へ向かう途中であった。支部長の「大分の山」では、別名おにぎり山とある。頭上のアンテナが近づくと急にあぜ道となり、山頂である。770・1の三角点で万歳、ヤッホーで下山、玖珠平野からの登りの苦労話を聞きながら15分で登山口、まだ10時前である。二日酔いも覚め一路大分へ。

1977年入会の私は、泊まりがけの総会は初めてである。不便な山中へ集ったことを一番喜んでるのは、梅木支部長である。出席は20人を越したと電話で知らせた時の声ははずんでいた。支部員みな本年事業に、個人山行に取り組みむ意気込みを感じた総会であつた。(西 孝子)

秋田支部

平成15年度定期総会報告

平成15年度定期総会が、4月5日(土)16時から、秋田市内の「大町ビル」会議場で開催された。昨年は市郊外の温泉地で行ったが時間的な制約があり市内での開催となつた。会員総数78名、出席23、委任状30で、参加率は68%、昨年に

比べ2ポイントの減である。

支部長挨拶のあと議事に入り、昨年度の事業報告では、自慢できる事業の一つとなった韓国との交流親善登山で、本年は韓国山岳会慶南支部の岳友11名が来秋、秋田支部会員10名が加わり、鳥海山と秋田市の最高峰・太平山に登って交流を深めたことなどを中心に、支部山行3回の大成功が報告された。会員の個人山行のうち、秋田県内の1000峰142座完登した鈴木裕子会員、東北六県382座踏破の深井是之会員の快挙も報告された。

支部会報は3回発行、通算54号となった。決算報告や監査報告承認のあと、平成15年度事業計画案が提案され、韓国や台湾の岳人たちの交流登山の継続、北海道・東北支部集会、全国支部懇談会、全国自然保護集会、本会主催の諸会議への参加、会報の3回発行などが、予算案とともに全員一致で承認された。(鈴木 要三)

残雪の秋田女神山

数年前から話題になっていた秋田女神山(870峰)への山行を、4月27日支部会員18名参加のもと



残雪を踏みしめ到着した秋田女神山

に実施した。この山は真昼岳に続く岩手女神山のすぐ隣にある。六郷町七滝から中腹にある電波塔までは車道と歩道が整備されているが、その先は藪こぎとなるので、残雪期をねらっての山行となった。

七滝の集落を過ぎ、電波塔に続く分岐の車道は閉鎖されていたので、ここからの歩きとなった。7時45分出発。大きく回り込む舗装された車道を進むと、対岸に山桜が美しく今を盛りと咲いている。やがて路面は雪で覆われ、ガスもかかり回りはまっ白となり、目指す電波塔への電線すら見えなくなってしまった。

車道は電波塔まで続くと思われたが、塔近くの右手斜面に取り付き、尾根を目指して登っていったら歩道に出た。急斜面を登り詰めると、雪消えの地面を黄色に染めて咲いているバツケ（フキノトウ）群生の台地に電波塔と管理棟があった。裏手の樹林帯を残雪を踏みながら北東の方向に進む。ピークを数えながら進んだが、ガスで回りは何も見えず、目的の稜線を見落としてしまったらしい。

やや後退し、地図と磁石を頼りに南寄りの方向のはずと強引に藪を漕ぎ進み、ようやく目的の稜線にたどり着いた。鞍部まで下ってから、広いブナ林の稜線を残雪を踏みしめ一步一步登る。名無しのピークから痩せ尾根をつたい、女神山に着いたのは11時45分だった。記念撮影をし、雪の中から見つけたキノコを煮込み、昼食を楽しんでいる頃からガスが切れ始め、真昼岳や岩手女神山を望むことができた。遅れて参加した深井さんも到着。佐藤悦さんは単身善知鳥から岩手女神山に向かっていった。帰りはゴゴミやバツケ、イタドリを摘みながらの楽しい山行であった。

(鈴木 裕子)

信濃支部

第57回ウェストン祭

この日だけは良い天気になるように祈ってきたのに時季はずれの台風が来ようとは、最悪である。温低に変わって雨量も少なかったが、100名ほどの峠越えの列ができた。いつもの半分以下である。さかのぼって百十余年（1891、明治24年）、2、3人の連れのガイドとけもの道をかき分けて歩いたウェストンの探検心に頭の下がる思いである。

たび重なる変遷を経て1947

（昭和22）年、今の場所にレリーフが再建され、これを記念して行われた式典を第1回ウェストン祭と位置づけ、数えて57回を迎えることとなった。

戦後間もないその頃、日本はまだ敗戦の跡生々しく、国全体が路頭に迷い、先行きまっ暗の時代であった。その時代にこれに心骨を注いだ先人たちの山に対する情熱、気骨には感慨無量である。

雨の上がつた碑前祭は本部から平山・平林正副会長、藤本総務・小倉前副会長、地元安曇村筒木村長はじめ多数の来賓と200名近

ユングフラウヨッホにいちばん近い村、ウェンゲンの家庭的なホテルアイガーと、スイスの旅の専門店アルプスウェイが自信をもってお勤めする共同企画。

アルプスウェイご利用で、ホテルアイガーにお泊まりの日本山岳会会員様へ4つの特典。

1. ユングフラウのよく見えるお部屋を優先的にご提供。
2. 民族料理フォンデュをご滞在中の夕食に1回ご用意。
3. アルプスウェイ駐在員による1日の専属ガイドサービス。
4. ホテルのオーナー、フックス氏より地元産リキュールをプレゼント。

あなたのスイス旅行を、このホテルアイガー滞在を組み入れてご利用します。

お問合わせ
お申込みは

アルプスウェイ
<http://www.fellow-travel.co.jp/>

〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂2-16-8 ビジネスヴィップ渋谷ビル4F
Tel.(03)5489-9541 Fax.(03)5489-6300
e-mail alpsway@fellow-travel.co.jp
〒530-0002 大阪府大阪市北区曽根崎新地2-3-13 若杉大阪駅前ビル6F
Tel.(06)6347-8984 Fax.(06)6347-8986
e-mail osaka@fellow-travel.co.jp

主催：株式会社 **フェロートラベル** （日本旅行業登録番号）
国土交通大臣登録旅行業664号 協賛：ウェンゲン観光局・ツェルマット観光局 後援：スイス政府観光局



ALPS WAY.
We Love Swiss

今年もさげんで会いましょう

い山を愛する人たちの歌声に導かれて始まった。平山会長、村長の挨拶から安曇小学校4年生11名、エーデルワイスクラブの歌声の中、献花と一連のセレモニーが続く。「ウエストンの歌」は彼を称えてこの日のために作られ歌い継がれてきたものである。

詩人で2代目支部長尾崎喜八先生の作られた詩が田村会員によって朗読、上高地の緑、穂高の黒、梓の青、すがすがしい流れるような響きの詩は雨上がりの木に映えて美しい。

第1回から恒例の山岳会の先輩による講演はこの式典のメインであり、楽しみのひとつである。

小倉童子評議員による「人と自然とちよつと冒険」は女性として初の早稲田大学山岳部入部の頃の初々しい話から始まり、中高年登山者へのアドバイスなど。数えきれないアドベンチャー体験の中から、山や自然を愛し、仲間を知り自らに合った山歩きを、山歩きは安全に楽しく、事故を起こさないためには自ら計画実行してみよう。

人と自然の共生、生涯登山の楽しみ、すばらしい登山人生に向けてちよつと冒険を……。その人柄で話す方も聞く方も肩の凝らない30分であった。

ウエストンの偉大な業績を顕彰し、その精神を後世に受け継いでいく、これがウエストン祭であると考え。幾多の歴史の跡を残しながら今があり、過去の事実の重大さを探ればウエストン祭を軽んずることはできない、永遠に続くことそれが歴史である。

参加者全員の「今日の日さようなら」のハーモニーに送られて1時間余の式典終了。ウエストンの遺徳に感謝し、今年も安全で楽しい山登りを。(中野 和郎)

徳本峠とウエストン祭

信濃支部主催のウエストン祭に合わせた恒例の徳本峠越えについて、首都圏支部、秋田支部より13名の参加希望者があり、その取りまとめ役として同行した。

5月31日朝4時半に新島々に着いたが、38年ぶりの5月台風に見

舞われた。現地では早朝より中野支部長ほか大勢の会員の出迎えをうける。

台風のため信濃支部としての徳本峠越えは中止となったが、首都圏支部と秋田支部より7名の会員が峠越えをしたいとのことで決行する。6時に登山口を出発、幸いにも雨は小降りとなり、沢沿いの平坦な道を進む。二股を過ぎ、2時間ほどで岩魚留小屋に到着。ここを訪れたのは昭和38年の夏合宿で50⁺を超えるザックを背にあえぎながら登った青春時代であったが、今にも朽ちて倒れそうな当時のままのたたずまいの小屋に時空を超えた不思議な感動を覚えた。

雨のため小屋の軒下にて休憩、食事をとった後小屋の横に立つ大きなケヤキの木の下から、いよいよ峠への急登が始まる。沢を右へ左へ渡り2時間ほどで沢を離れ「力水」へ。さらに急登となり20分1ピッチにギアダウンして1時間汗を流したところで徳本峠の小屋に到着。

本来ならばこの峠より穂高連峰のすばらしい山並みを見て、今までの苦しいアルバイトも一気に吹き飛ばすところであるが、残念なが

ら台風のため眺望はゼロ。初めて徳本峠を越えるメンバーには誠に気の毒であったが、峠を越えた達成感のようなものがメンバーにあったことでホツとする。

下降はしばらく夏道を歩くが、今年は沢に雪渓が多く残っており、雪渓を直線的に下降し、時間を短縮。明神出合いに着くとそこは可憐なニリンソウの群落で疲れを癒される。空模様も雨があたり時折青空がのぞいて明神の東稜が垣間見えた。夕刻4時、今日の宿である山研に到着。小川理事、本田山研委員らの出迎えを受ける。夜、幻のシェフ坂本委員の特製料理と酒で大いに盛り上がった。

翌日は薄日の射すなか、中野信濃支部長の発声で始まったウエストン祭に続き、信濃支部主催による午餐会がホテル白樺荘にて開催、来賓の方々百余名が参加された。

今年の徳本峠越えは悪天候であったにもかかわらず、何ごともなく終えることができた。特に小川山研担当理事はじめ、ミニ水力発電担当の森委員、本田委員、シェフの坂本委員、また管理人の木村さんご夫妻には大変お世話になりました。

(井上 功)

岐阜支部

春期現地小集会 這法師嶺

5月25日、奥美濃の春は真つ盛りで、新緑と歴史の山行となった。

8時に樽見鉄道の終着駅に集合した19名の参加者は4WD車に分乗。温見峠に通じるジグザグのR157を進み、大河原集落を過ぎ、「官道法師峠道」と書かれた立札のあるところに着いた。今日の登山はここ(標高500m)からスタートとなる。根尾西谷川の沢に向かって少し下りたところで川幅数分の浅瀬を徒渉、しばらく雨が降っていないので水量は少ないが、それでも膝上まであった。



這法師嶺三角点にて

9時20分全員対岸へ徒渉できたところへ出発する。「ほぼ擦り地藏さん」が石積みみの祠の中に祀られ、這法師嶺(1037・3m、三等三角点)への安全を祈って過ぎる。ところどころ春のどか雪で折れたと思われる枝木が行く手を阻むが、先頭集団が鉦と手で払い、快適にどんどん高度を稼ぐ。遙か下の谷から樹林を抜けてくる風が涼しい。この辺りのブナの原生林は白神山地にも勝るとも劣らない美しさだ。

道幅は踏み跡程度で急なところにはロープが付いている。稜線に出ると右側に樹間から頂上がチラリと見えて確かな踏み跡があり、10分ほどで頂上に着く。

12時、全員の到着を待つて乾杯。今日のコースは途中ほとんど眺望がきかないが、頂上に来て初めてたどってきた尾根と根尾西谷川を挟んで前山と能郷白山が望まれ、沢沿いに残雪を見ることができた。来た道を引き返し、這法師峠(蠅帽子峠ともいう)を指す。稜線を西にたどって目印から5分ほど下ると峠だが、目印のある稜線を10分くらい進むと根上がりヒノキの群生がある。

987mの峠に全員揃ったのは13時40分。この峠は記録によると美濃と越前を結ぶ間道として鎌倉末期の頃には僧侶や武将が通った。1846年に大垣藩が8年間かけた工事が完成し、越前への本街道になった。歴史上もつと有名なのは水戸の浪士で天狗党武田耕雲斎ら1000人が元治元年(1864)12月5日、2日の雪をかき分け峠越えをした。福井県の大野に着いた一行は心身ともに疲れ果て、加賀藩に降伏し処刑された。という悲しい史実があるようだ。

峠の一部は幅も広く地蔵があり、



先住民の生き方・伝統と大自然を体験する

シベリア・ビキン川流域タイガに暮らす

ウデゲ人と過ごす8日間

2003年9月15(月)-22日(月)

235,000円

狩猟と漁労の民・ウデゲ人の案内で川を遡り、キャンプ地へ。魚釣り。森歩き。たき火を囲んでウォッカで乾杯! 新鮮な川魚。シカ肉。自然を愛する仲間と出会う、感動あふれる旅。

問い合わせ先 国際環境NGO FoE Japan野口

電話 03-3951-1081

e-mail siberia@foejapan.org

URL <http://www.foejapan.org>

往時を偲ぶ古道の感じで、その先は踏み跡程度で2万5千分の1の地図にも越前側には道がない。13時50分峠に別れを告げ、山腹のブッシュで荒れた踏み跡を辿り、途中立ち木につかまりながらトラバース、25分で稜線に登る分岐点に戻る。ここからは道が開けて快調に下山する。

徒渉地点に戻り、安全のため補助ザイルで確保し全員渡るには15分かかった。16時25分、本日のリーダー白木さんと西條福支部長の挨拶があり、現地にて解散する。

(中島 眞一)

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度をお願いします)



イラスト・宇都木慎一

日本山岳会 100周年への夢

坂倉 登喜子

日本山岳会の100周年記念の計画が会報に発表されて、行事に対する予算も考えられたようです。

以前に資料委員長だった佐々会長は会の100周年には、山岳博物館の設立を希望しておられました。その後資料委員長をやめてからはその計画は、いつか資料委員会ですら忘れられた状態となりました。

現在日本には山岳博物館は大町と松本と大迫の3か所にあります。佐々元会長が資料委員長の折りに、資料を3つの山岳博物館に預けておき、東京に日本山岳会の山岳博物館ができたならそれらの資料

を戻してもらおうという計画でした。しかしそれらの資料はそのままとなり、私のエーデルワイスのコレクションも預けたままになっている状態で、いつ日本山岳会の博物館ができるのか不明のままになっているのが現状です。

私のエーデルワイスのコレクションは、今早池峰山麓の大迫の町の山岳博物館に展示されていますが、この町にエーデルワイスの展示館を作って、町の活性化に役立てようと現在計画されています。

日本山岳会の博物館ができれば各山岳館に預けてある展示品は3か所から戻ることでしょう。各博物館に貸出している資料は返送してもらえ、展示品はすぐ集まるので、展示する場所を探すのが先決だと思います。

私のもうひとつの念願は、日本山岳会の会歌をつくっていただき、ウエストン祭で歌いたいというのがあります。

このふたつは、前々からの私の念願ですが、会員のみなさんは私のこの夢をどう思われるでしょうか。100周年の夢が永久に残ることを念じます。

海外登山基金助成の 審査経過の公開を望む

平井 一正

日本山岳会海外登山基金助成の応募要綱には「困難を求めている挑戦、発想の新しい、夢多い計画などユニークな登山計画の支援に対して助成されるもので、パイオニア精神にあふれるさまざまなジャンルの挑戦を歓迎したい」とある。

〔山〕02年9月号

平成13年度の海外登山基金は、日印合同東カラムパドマナム峰(7030㍎)、チベットのサナルン峰(7095㍎)(日大)、チベットロンライカンリ峰(6859㍎)(同志社大)の3隊に助成された〔山〕02年4月号。一方

平成14年度のそれは冬期ローツェ南壁(JAC東海支部)、アンナブルナー南壁(明治大)、エヴェレスト・ローツェノーマルルート(東京農大)の3隊に決まった〔山〕03年3月号。見解の相違とはいえ、両年度の審査結果に疑問を感じる。審査委員会の審査経過は非公開ということで明らかにされていないが、少なくとも応募件数とその内容、採択理由などは関係者として知りたいことである。

実は神戸大学は今年の秋に、東チベットのインド、ミャンマー、チベットの国境地域のカンリガルボ山群最高峰ルオニイ峰(6610㍎とも6805㍎ともいわれている)初登頂と学術調査を目的とした学術登山隊(総隊長平井一正)を派遣する予定である。この地域は、国境地帯ということもあり、長年外国人の立ち入りが禁止されてきた。それだけに未だ探検の対象地域でもあり、名前も高度も明らかでない未踏の高峰が屹立しており、数少ない残された秘境である。登山隊としても世界ではじめてである。

この計画は、十分に冒頭に述べた海外登山基金の趣旨に合致する

と思いましたが、理事会として推薦できないと不採択となった。海外登山基金助成対象は、日本山岳会がどういふ登山隊を評価するかの姿勢につながる。そしてそれは世界中の登山家の評価に十分にあたえられるものでなくてはならない。一定の審査基準が存在するものでもないで主観が入ることは仕方ないが、それだけに審査理由が非公開というのは不明朗さがあり、審査委員や審査理由を明らかにするなどの改善を求めたい。それが夢のある新鮮な計画を育てることにつながるであろう。

国際登山者会議の「チロル宣言」はおかしい

岡澤 祐吉

昨年9月、国際山岳年の締めくくりとしてインスブルックで開かれた国際登山者会議は「チロル宣言」を発表した。初日の晩にはヨーロッパのアルプス交響曲を演奏するなど、大がかりなものだったらしい。

世界から23の山岳団体代表を集め、登山史に名を残すような者を

多数招待したうえでの宣言だったから、権威ある指針を登山界に示したことにものなるのだろう。

この「チロル宣言」に、この会議の分科会で「クライミング倫理」を担当したスイス山岳会が疑問を投げかけたので、そのあらましを紹介したい。この宣言に盛り込まれた登山の「倫理」は我々には解りやすい。危険と向かい合う緊張感、そして自己確保といった冒険的要素、これこそが本物の登山の倫理だ、というのである。

しかし、宣言の中でひとまとめにスポーツクライミングとする登山のあり方は、この会議という登山とはまったく違い、関わっている者の考え方も、もう相互理解できないほど隔たっているという。

数十年前にフランスやイタリアで生まれ、今では南ヨーロッパ全体に及んでいるこのスポーツクライミングを、数万のドイツ人、オーストリア人が愛好し、フランスやイタリアなどでは大勢のイギリス人がこれを実践している。ある山岳雑誌のアンケートに応じた者の80%はこのスポーツクライミングに満足し、「チロル宣言」でいう規範などは不要としている。も

しこの宣言を彼らに受け入れさせたいのなら、なぜ彼らの代表をこの会議に招待しないのか、とスイス山岳会の評者は主催者側の姿勢に疑問を投げる。

この宣言は一方的でエリート寄りに作成されたもので、最近めざましい活躍をしている女性への配慮も、将来を担う子ども、青年、最近増えている家族登山に対する安全策についての配慮も欠けている、と説明する。

このインスブルック国際会議の初日、基調講演者にR・メスナーを当てることにもその欠陥は表れていると言えそうである。ナンガパルバット遠征にからむ訴訟沙汰で敗訴し、そのため山岳誌「アルピニズム」を窮地に追い込んだはずなのに、ヨーロッパの日本への人気も助けとなり、日本にファンの多いメスナーは今なお命脈を保っている。

しかしそのメスナーでさえ、新しく育ち、膨張を続ける異質のスポーツクライミングの側からは古い時代のひとりと見られつつある。このチロル宣言は根本的に質的欠陥をもっているというのである。なお、この場を借りて諸賢にお

薦めたいのは、ルーム図書室の海外山岳誌を時には開いて欲しいということである。言語は理解できなくとも、最近の写真が豊富なので、新しい情報を能率的に見ることができると思う。インターネットの情報過多に惑わされることを避けることもできる。

シラギントワイトの本

山本 健一郎

このところ二度ばかり、深田久弥さんとの山登りの思い出話をす



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをここからがけたい。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町23 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋千代区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

る機会があった。そうすると当然シュラギントワイト3兄弟のあの本にも話が及ぶ。ところがシュラギントワイトを知っている人はほんの一握りだった。私が入会した頃は知らない会員などいなかった。ろくに、世の中変わったものである。

ヘルマン、アドルフ、ロベルトの3兄弟が東インド会社の委嘱を受け、1854年から58年にかけて行った探査の報告は『インドおよび高地アジアの科学調査隊報告』として当初9巻の予定が4巻と付属の『地図・パノラマ図』が刊行され、初期ヒマラヤ探検の貴重な文献とされていたが高価かつ入手困難で、日本に現在3組くらいしかないようだ。

シュラギントワイトの業績と著書の紹介が本稿の目的ではないが、当時インド奥地の探検がいかに困難であったかは、アドルフがカシユガルで現地住民の襲撃に合い非業の死をとげたといえばおわかりただけよう。興味のある方は小林義正著『山と書物』の「シュラギントワイト兄弟の業績」と続編の「シュラギントワイトを獲る記」をお読みいただきたい。『山

と書物』の正・続2巻はルーマの図書室にある。

ところで戦前木暮理太郎さんがこの本を350円（家が一軒買えたらう）もの大金を投じ入手され、当会に寄贈されたことを知る人も少なくなつたようだ。しかし残念にもこの貴重な本は虎ノ門のルームが戦災に遭つたとき、ほかの蔵書とともに灰燼と帰してしまつた。やむを得ない事情とはいえ、木暮さんからいただいた貴重なこの本を失つたことは後輩として誠に申しわけないと思つてゐる。

戦後ゼロから再スタートした図書室は、諸先輩のご尽力により蔵書1万3千冊におよぶ日本一の山岳関係の図書室となつてゐるが、残念ながらシュラギントワイトの本は納められていない。

深田久弥さんは日本百名山で読売文学賞を受賞されたおり、副賞の賞金にそれを上回る資金を加えてこの本を入手された。志げ子夫人が文学賞のお陰でうちは貧乏になつたのよと笑つておられたが、あのさわやかな笑顔が今でも目に浮かぶ。

これについては島田巽さんが「文学賞の行方」と題して一文を

書かれ、みごとな散財と褒めておられるので、図書室で島田さんの著書をお読みいただきたい。深田さんの蔵書のうち洋書はシュラギントワイトのこの本も含め一括して国会図書館に納められている。

私は100周年を迎えるに当たり何か形あるものを残したいが、それにはこの本が良いのではないかと思つてゐる。もし売り物がでたら値段にもよるが理事会で検討していただこうと思ひ、水野勉さんに探していただいているが、なかなか売り物が出ない。付属の『地図・パノラマ図』は(95×63センチ)だけが売りに出たり、ばら売りにされることもあるようで、ルームの入り口に掛けてあつたシュラギントワイトの「カンチェンジュンガ」の絵は松方三郎さんが入手され、会に寄付して下さつたものと水野さんに教えられた。

先日この絵をよく見ようとルームに行つたが、別の絵が掛かつていた。5月の総会資料の財産目録には載つていたので、資料委員が大切にしまいこんだのだらうが、時には年次晩餐会などで虫干しを兼ねて展示されたいかがなものだらう。

ハリッシュ・カパディア氏 RGSゴールドメダル受賞

中村 保

ヒマラヤン・ジャーナルの編集長、ハリッシュ・カパディア氏が6月2日に英国の伝統ある王立地理学会(Royal Geographical Society)からもつとも栄誉あるふたつのゴールド・メダルのうちのひとつパトロンズ・メダル(2003年)を受賞した。ヒマラヤにおける先駆的な登山と地理的発見に大きく貢献してきたことが評価されてのことである。受賞式は英国女王陛下戴冠式の正に50周年記念日に行われ、折りしもエベレスト初登頂50周年とも重なつた。

カパディア氏はこの輝かしい賞を先年テロの凶弾に倒れたご子息、インド陸軍第3グルカ連隊ナワン・カバディア中尉に献呈した。「ナワンはヒマラヤ巡礼の情熱を私と共有し、自然を愛し、ヒマラヤの環境保護に尽くした。」と語つてゐる。

知日派でもあるカパディア氏と日本の登山界との関係は浅くない。インド・ヒマラヤにおけるパイオ

ニア的な探査・登山を自ら精力的に実践し、かつ日本からの遠征隊に支援を惜しみなく続けてきた。昨年には日本山岳会との東カラコルム日印合同2002遠征隊の隊長としてパドマナブ峰(7030m)の初登頂と未踏のテラム・シエル氷原の踏査を成功に導いたことは記憶に新しい。

インド人としてゴールド・メダルを受賞するのは1877年のパンディット、ナイン・シン以降カパディア氏が二人目で125年ぶりのことである。残念ながらインド以外のアジアの国には受賞者はまだいないが、ヒマラヤン・クラブの日本支部メンバーにとどまらず、日本の登山界にとつてうれしいニュースである。

王立地理学会は1830年に創立された。地理学会としては世界的でありヨーロッパ最大の規模である。13300名の会員を擁し広範な活動を行っている。1832年以降171年間にわたりゴールド・メダルが授与されてきた。その中で、登山およびヒマラヤ・チベット・中央アジア・極地・アフリカ探検にかかわった受賞者は次の通りである。まさに探検史・

登山史を彩るきら星のひとつである。ハリッシュ・カパディア氏の功績をあらためて称えたい。

Captain Henry Strachey (1852), Rev. David Livingstone (1855), Captain T. G. Montgomerie (1865), Dr Thomas Thomson (1866), Robert Shaw (1872), Ney Elias (1873), Henry Morton Stanley (1873), Sir Joseph Hooker (1883), Lt. Colonel T. H. Holdich (1887), Sir F. E. Younghusband (1890), Edward Whymper (1892), Dr Sven Hedin (1898), HRH Duke of the Abruzzi (1901), Douglas Freshfield (1903), Commander Robert Scott (1904), Sir Martin Conway (1905), Captain Roald Amundsen (1907), Dr. M. A. Stein (1909), Col. H. H. Godwin Austen (1910), Dr Filippo de Filippi (1915), Capt. F. M. Bailey (1916), Col. C. K. Howard Bury (1922), Brig Gen C. G. Bruce (1925), Col. E. F. Norton (1926), Major Kenneth Mason (1927), Dr Tom Longstaff (1926), F. Kingdon Ward (1930), HRH the Duke of Spoleto

(1932), Hugh Rutledge (1934), Eric Shipton (1938), H. W. Tilman (1952), Lord John Hunt (1954), Sir Charles Evans (1956), Prof. Ardito Desio (1957), Sir Edmund Hillary (1958), Professor Augusto Gannser (1968), Sir Chris Bonington (1974), Michael Ward (1982), Doug Scott (1999), Reinhold Messner (2001), Harish Kapadia (2003).

京都支部

恒例納涼ビアパーティー

村山 祐嗣

昨年2月のスキー集会でお会した京都支部の方のお誘い(?)で、89年来支部恒例の暑気払い「大文字ビアパーティー」に伺った。昨年7月末の土曜日、銀閣寺山門前17時30分集合、会場は大文字山の「大」の火床。当日私はその前に愛宕山でひと汗かいてから参向。日中も夕刻も天候に恵まれ、先ほど歩いてた彼方の山を正面に見据えての宴は誠に爽快だった。かくのごとき楽しい集いはもつ

と情報公開されてもよろしいのではないかと、京都の『支部だより』68号に掲載された木之下繁会員の軽快で涼しげな報告を、氏のご承諾をいただき、以下に転載する次第です。

『7月の最終の土曜日27日、大文字ビアパーティーに参加しました。それは五山の送り火で知られる大文字山の「大」に登り、そこから望む京都市内の夜景を肴にしての納涼宴会。京都支部ならではの暑中の催しで、夕日と夜景は何といつても魅力です。

山の本の古書店

在庫目録年2回(5月・11月)発行
ご希望の方お申込ください。

ご蔵書を整理するときはぜひ弊店に!



古書買入

晴山書房

東京都中野区上鷺宮4-6-3

TEL&FAX 03(3990)4540

銀閣寺前に午後5時半に集合とは承知していましたが、30分前に一人で上り「大」の一番上でしばらく市内を展望していました。以前と比べて、いらかの波よりもマシヨンなどの建物が目立って来たなと思って眺めていました。6時過ぎに弘法大師を祀っている金尾に降りると、参加者がシートを敷くなどして宴会の準備にかかっていました。総勢26人が参加。

この日の夕日は「これまでで最高!」との評判でした。西山の上にたなびく雲を赤銅色に染めながら徐々に沈んでいく夕日。シルエツトのような西山。明かりの数が増えて宝石の輝きに満ちる京都盆地。何ともいえぬこの光景は見飽きることがない。汗が引きビールやワインの酔いもまわってきて納涼宴会は盛り上がりました。

参加者の自己紹介では、なじみのある面々の中に初めての方もあり、関東からみえた方も。午後9時に下界に降り、銀閣寺前で万歳を三唱して散会しました。」

*今年は7月26日(土)17時半、銀閣寺山門前集合です(問合せ先 伊原哲士さん TEL・FAX 0743-54-6685)。

Climbing & Medicine · 23

アンケートに見る 中高年登山者の健康状況

山本 正嘉

中高年登山者の事故が増加し、問題になっています。そして事故があると、世間では「年寄りの冷や水」的な批判が起こります。反対に私たち登山者の方では「自分だけは大丈夫」と思っている人が多いように思います。

もう少し具体的に中高年登山者の身体の状態を調査し、何をどう注意すればよいかを明確にしていかないと、事故は減らないでしょう。

そんなことから私は、ここ数年、中高年登山者の実態をアンケート調査しています。これまでに東京、名古屋、京都、大阪、広島、福岡から600名以上のサンプルが集まりました。その中から、健康状況に関するデータを紹介します。

まず持病については「ある」と答えた人が52%もいました。トップは膝関節痛で21%、ついで腰痛15%、高血圧症12%、白・緑内障、胃腸病、糖尿病、心臓病、低血圧症はそれぞれ3~4%、肝臓病が2%、その他が

10%でした。

登山の事故で一番多いのは、下り道での転倒、転落、滑落です。これらの事故原因を調べていくと、膝関節痛のために下りで足の踏ん張りが効かず、転んでしまったという人も少なくないのではないのでしょうか。

その一方で登山は、心身の健康にすばらしい効果ももたらしています。登山を始めてから心身の健康でよくなったことや悪くなったことがあるかを尋ねてみると、「良くなったことがある」が71%、「悪くなったことがある」が11%でした。

良くなったことの内容は、身体面では「体力がついた」「風邪を引かなくなった」が15%ずつ、以下「身体が軽くなった」9%、「疲れにくくなった」7%、「健康になった」5%でした。精神面では「生活の充実」17%、「ストレスの解消」16%、「性格の変化(生き方が前向きになった、明るくなった等)」11%などでした。

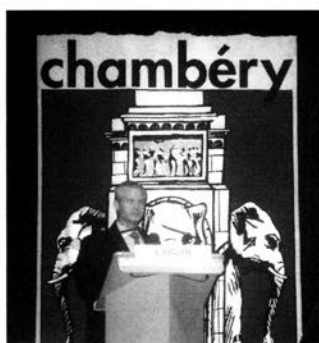
なお悪くなったこととしては、「膝関節痛」が最多で6%、「腰痛」と「肩こり」が2%ずつでした。ただし、登山を始めてからこれらの症状が良くなったという人もおり、どちらに転ぶかは登山のやり方次第だということでしょう。

各自が健康管理に注意するのはもちろんですが、特にリーダーとなる方は、メンバーの安全を預かる責任上、このような知識が欠かせないと思います。

海外の山

「国際山岳年」から 「国際パートナー シップ」へ

江本 嘉伸



シャンペリーでの国際会議。講演者の背後のゾウ
はこの町のシンボルだ (6月30日 江本撮影)

フランス東部、サボア地方の古都、シャンペリーは、人口5万7千人ほど、古城やふるい大聖堂が残る、歴史の香りを残す町だ。『アルプスへの玄関口』を自負する山の都市でもある。6月30日、7月1日の2日間、この町で「国際山岳年」を締めくくり、2003年以降の協調体制について話し合う「国際山岳年総括会合」が、50か国代表が参加して開かれた。筆者も日本委員会事務局長として日本を代表するかたちで駆けつけた。

「国際山岳年」では、世界78の国々

に国内委員会が発足し「山」というテーマに取り組んだ。正直、はじめは各国とも、どのような行動を起こしたらいいのか、戸惑ったであろう。でも、ともかくもそれぞれの国の事情にあわせて具体的な行動を起こし、それなりの成果をあげた。

初日はその成果、つまり山岳年で自分たちは何をやったか、について各国「厳密に3分間以内」の約束で報告することとなった。しかし、壇上に立った瞬間、最大限に頑張るのが国への責務、と考えるのか、6分、7分、10分、と時間をオーバーする報告者が続出、スケジュールは大幅遅れとなってしまう。

参加者のほとんどはなんらかの政府機関代表であり、中でも、アフリカからの参加が20か国を数えたのは驚いた。全体を通じて森林を専門とする人が目立ったのは「国際山岳年」の中で、森の問題が大きかったためであろう。

政府代表が多い中、登山団体の代表と学術分野の代表で組織した日本委員会は、かえって目立つ感じであった、と思う。私は日本委員会が随時政府機関の支援も受けつつも、登山家と学界代表で組織した民間のネットワークであること、自分がジャーナリストであり、決して日本政府

を代表するものではない、と断りつつ、駆け足で日本委員会の活動を説明し、ちょうど1年前富士宮市で開いた「富士山エコ・フォーラム」で小学生たちが朗読した「富士山からのメッセージ」の英文訳(富士山の写真入りのものを会場で配布した)を読み上げた。富士山は、誰でも知っている。「次世代への思いをこめたいわかりやすいメッセージ」と、好評だった。

2日目には、今回の会合の大事なテーマである「山岳国際パートナーシップ」への取り組みについて議論された。

昨年夏の「ヨハネスブルグ・サミット」で「国際山岳年の明日」に関して重要な提起がなされている。

山岳年は、国連食糧農業機関(FAO)をはじめ国連環境計画(UNEP)、15の国の政府代表から構成されるグループによって、おもに運営されてきた。その代表であるスイス政府から「持続可能な山岳開発のための国際パートナーシップの設立」が、ヨハネスブルグで提言されたのである。山岳年以後も、国際社会は協調して山の問題に取り組む、という決意である。

これに対し、多くの国、機関が参加の意思を表明し、7月1日の時点

で32か国と15の国際機関が正式に加盟手続きをとっている。中でもイタリア、スイスはいち早くこの活動のための資金の支援を約束した。日本は政府として「国際山岳年」に真っ向から取り組んでこなかったため、目下加盟していないし、資金貢献の計画もない。

「国際山岳年」の一応の仕事は、今回のシャンペリー会議で終わり、次回は「山岳パートナーシップ」というかたちでの国際協力が始まるとうしている。その第1回会合がことし10月5、6日、イタリアのミラノで開かれることも決まった。

日本委員会としては、急ぎ関係政府機関と相談し、なんらかの形で山岳パートナーシップに加盟するべきだ、と考えている。新たな受け皿は「ヤマ・ネット・ジャパン」として信州大学を事務局に秋にも発足させる予定だが、その際、これまでと同じく日本山岳会をはじめとする登山組織には是非加わってほしい、と思う。

「日本山岳会定款第2章・目的および事業」の冒頭に「本会は、山岳に関する研究、知識の普及および健全な登山指導、奨励をなし……」とある。山岳の研究。その目的にも叶うではないか。

図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

『New Zealand Alpine Journal 2002』

ニュージーランド山岳会の年一回発行の機関誌54号である。

(1)国内の岩と氷、(2)海外登山、(3)山岳所見、(4)国内地域別報告、(5)追悼、(6)詩に大別されている。

(1)15人が執筆し、家族による山行から岩と氷の世界まで幅広くニュージーランドの山が紹介されている。1年を通して氷河が存在していることは羨ましく限りだ。

(2)海外遠征20件が記載されている。なかでもK2北面、アラスカでのデナリ周辺の縦走、ハンティントン、ギルバート・ルイス登山などが目を引く。また中央アジア、モンゴル、インド、パキスタン、

ネパールヒマラヤ、ペルーなどにも足跡を残した。

中村保氏(日本山岳会会員)から贈呈のあった本に刺激を受け、中印紛争で62年以降は入域難となっていたカンリン・ガルボに出かけた報告なども興味深い。これら遠征の件数はニュージーランド山岳会の海外登山支援金を受けている。

(3)氷河湖成長の過程をイラストで判り良く説明している。また、火山活動で決壊危機が迫っているクレター湖の防災工事と自然保護運動との葛藤が取り上げられている。

(4)アオラキ、マウントクックなど8つの山域について最新の山行実績、山小屋、トレール情報が掲載され、これからの訪問に役立つ。総じて当機関誌は氷壁に挑む登山から家族山行まで広範囲にわたる掲載されている。(南井 英弘)

New Zealand Alpine Club刊
136頁

『奥多摩登山考』

金邦夫・著

著者は警視庁青梅警察署山岳救

助隊副隊長として奥多摩で発生した山岳事故の救助活動を仕事とされる現役の警察官である。

高校時代から登山をされ警視庁山岳会「クライム・ド・モンテローザ」を創設(現会長)し、谷川、剣、穂高などの岩場、冬期クライミング、ヨーロッパ三大北壁にも挑戦した。また昭和52年米国ヨセミテにおける山岳救助研修にも参加し、平成5年から現在まで現職につかれている。

その間、東京都公園協会奥多摩ビクターセンターが毎月(現在は隔月)発行の機関誌『あびえす』に、奥多摩における事故事例や注視点、奥多摩の山の魅力などについて執筆したものを一冊にまとめたものである。

青梅署管内だけでも毎年20件から40件に及ぶ山岳事故が発生しているが、その発生からの経緯および救助活動を中心に春山、夏山、秋山、冬山、奥多摩有情の5編に分けている。発生場所も広範であるが、原因も道迷い、滑落、水難等々多岐にわたる。しかし大部分の事故が登山者の基本的マナーの欠如、勉強不足が原因の初心者型の遭難である。

それぞれ事故の経緯だけでなく、環境の説明、地名解説などが折り込まれており、地図と一緒に読まれば奥多摩全般の勉強にもなると思われる。

奥多摩登山考の題名通りの内容である。(茂見 猛)

2002年3月 発行者代表・
(財)東京都公園協会 256頁
非売品

三浦敬三・著

『98歳、元気の秘密』 『99歳、モンブラン 大滑降に挑む』

著者は北大の学生時代に八甲田でスキーの魅力に取り付かれてから98歳(今年99歳)になるまで生活のほとんどがスキーと結びついており、年をとってもボケずにスキーを楽しむために何をすべきかを考え、実行しておられる。

前冊は老いために自分がかえ出した玄米を主とした食事法と8種類のトレーニング法がわかりやすいイラスト付きで書かれており、誰でもすぐに実行できるものばかりだ。

また、年齢の節目ごとにスキー

山行の目標を立て、実行に向けて努力しており、白寿の今年は息子(雄一郎氏)、孫、ひ孫の4代でモンブラン山系のヴァレ・ブランシユを滑る目標を立てるなど、中高年の我々にとっても参考になることが多い。

後冊は2章に分れていて、1章では1999年から2000年にかけて著者が96歳の時のスキー活動を、11月のカナダのウィスラーから翌年5月の立山でのスキーを具体的に記している。

2章ではヨーロッパアルプスでの滑降を、75歳でのシルトホルンから90歳でのヴァレ・ブランシユまで9か所のコースについて詳細に書いている。コースごとの地図と写真が説明を非常に解りやすくして、これらの山域に行く人にも貴重な資料になると思う。

なお、JACのアルパインスキークラブの年報『雪上散歩』の編集委員は昨年、著者にお会いしてインタビュー記事と同誌(第12号)に載せている。(小松原 一郎)

前冊 2002年4月 祥伝社
発行 188頁 1238円
後冊 2002年6月 草思社
発行 303頁 1800円

図書受入報告 (2003年5月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
原山智	超火山「槍・穂高」:地質探偵ハラヤマ北アルプス誕生の謎を解く	237pp/19cm	山と溪谷社	2003	出版社寄贈
田淵行男	山の季節(小学館文庫 No.G-ター-8-1)	205pp/16cm	小学館	2003	出版社寄贈
日本登山医学研究会(編)	日本登山医学シンポジウム(2003)プログラム・抄録集	80pp/30cm	日本登山医学研究会	2003	発行者寄贈
水越武	世界遺産屋久島:多様性の回廊	159pp/29cm	講談社	2003	出版社寄贈
大橋俊夫	尾瀬:空・水・光(大橋俊夫写真集)	95pp/27cm	日貿出版社	2003	出版社寄贈
樋上嘉秀	台高の沢:関西の沢登り No.1	222pp/20cm	ナカニシヤ出版	2003	出版社寄贈
木下是雄	ヒマラヤ・トレッキング:Trekking in the Himalayas	125pp/20cm	新樹社	2003	著者寄贈
JAC静岡支部(編著)	天山登山報告書:チャウカラガイ・ムズターグ(2002)	61pp/30cm	JAC静岡支部	2003	発行者寄贈
高桑信一	山の仕事、山の暮らし	446pp/20cm	つり人社	2003	出版社寄贈
佐藤恭(編)	望月達夫氏追悼特集(針葉樹会報 第98号 2003年4月)	41pp/26cm	針葉樹会	2003	発行者寄贈
草川啓三	鈴鹿の山を歩く	334pp/20cm	ナカニシヤ出版	2003	出版社寄贈
安藤忠夫	山がたり本がたり	456pp/22cm	安藤忠夫(私家版)	2003	著者寄贈
日中合同メコン川航行踏査隊	メコン川航行探査報告書:深い浸食の国へ	12pp/30cm	日中合同メコン川航行踏査隊	2003	発行者寄贈
佐々木民秀(編)	韓国俗離山・月岳山・鳥嶺山・小白山親善登山報告書(2002)	48pp/26cm	JAC秋田支部	2002	発行者寄贈
山本恭平	山頂を去る時	49pp/20cm	岩波出版サービスセンター	2002	神田道雄氏寄贈
Roberto Mantovani	Everest: History of the Himalayan Giant	144pp/36cm	White Star	2001	購入

会務報告

5月理事会

日時 5月14日(水)18時30分～20時40分

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕 大塚会長、長尾、村井、芳賀各副会長、西村、坂井、今村、高原、朴元、鳥居、藤本、高遠、鈴木、河西、宮下、小川、中村、黒川、松原各理事、古市、内田各監事、平林、宮崎、宇田川、鯉坂各常任評議員

〔委任〕 大野理事

〔審議事項〕

1 規定類の改正について

西村、高原
下記の規定類について、別添資料により提案された。

①「就業規則」

(主旨)「主事、書記等職員の仕事に関する規定」(昭和46年12月1日制定)を現状に合わせて見直した。

(実施) 平成15年5月14日

②「旅費規定」

(主旨) 現状に合わせて見直した。また書式を改正した。

(実施) 平成15年5月14日

③「図書利用規定」

(主旨) 現状に合わせて見直した
(実施) 平成15年5月14日(承認)
2 環境大臣および林野庁長官宛「山岳地域における登山道の荒廃防止」の要望書提出について

河西

標記につき、別添書類により提案があった。なお、本案件は緊急を要したもので事後承認となる旨の報告が併せてあった。意見として、もう一步突っ込んだ内容としてはどうか等があった。(承認)
3 戦前「山岳」復刻版第2期の刊行と覚書の一部改定について

西村

株式会社アテネ書房との覚書(平成13年2月理事会承認)の内容容について同書房より別紙にて改定依頼(主な内容―謝礼の支払い方法で保証部数、2期で200部を100部、3期で70部とする。また支払い時期について)があった。(承認)

(承認)

4 岐阜、山形各支部長改選について
西村

次の通り新支部長改選申請があった。

(岐阜支部) 早田 道治 会員

番号5626

(山形支部) 菊地 俊彦 会員

番号9276

(承認)

〔報告事項〕

1 評議員会開催報告について

村井副会長

4月19日開催の標記について以下のとおり報告があった。

●平成15、16年度会長・副会長の改選について、会長は票決の結果平山氏、副会長は平林、芳賀、橋本の3氏を推薦することに決定した。
2 写真掲載、名義後援等の依頼について

西村

以下の依頼に対して承認した。

●山と溪谷社より「山と溪谷6月号」で掲載する「1970年当会エヴェレスト遠征のベースキャン」の写真。

●当会同好会「アルパインフォトビオクラブ」より、5月29日より上野松坂屋で開催する山岳写真展への名義後援。

3 海外登山状況について 坂井

●東京農大隊は5月10日、ロッツエ(8516m)登頂。引き続きエヴェレスト登頂を目指す。

●明治大アンナプルナ南壁隊は、4月26日7100mまでルートワークし現在アタック体制づくりをしている。

4 文部科学省競技スポーツ課に

よる「公益法人の業務等の実地検査の結果」について 村井副会長

4月9日付で標記の通知があった。チェック4項目全てAランク評価(A、B、C、DがありAは「改善の必要は特にありません。引き続き適切な運営に努めて下さい」の内容)だった。

5 日印合同東カラコルム踏査・パドマナム登山隊2002会計報告について 坂井

標記が別紙によりあり理事会として了解した。

6 支部行事等への参加予定について

支部総会への出席報告があった。
4月12日 岐阜(村井副会長、山梨(芳賀副会長)、山陰(長尾副会長)、19日東海(今村常務理事)、20日信濃(西村常務理事)
7 監事監査報告について

古市、内田

4月14日に行った平成14年度における会計監査ならびに期中における業務監査が別紙にて報告された。主な内容は以下のとおり。

●会計、業務とも正確で妥当である。
●終身会費積立金について、取り崩されることなく現在にいたって

おり積立て額も相当になっている。しかるべき規定を定めて適切な活用をはかる時期であると考ええる。

総務委員会

高原

●規定類「ルーム使用要領」の改正をした。

財務委員会

村井副会長

●平成15年度4月の予算管理状況。

●平成15年度除籍対象者(別紙)の報告があり、知人等がいれば連絡してもらいたい。

会報編集委員会

今村

5月号は、エヴェレスト登頂50周年を迎え、1970年日本人初登頂者の松浦輝夫氏に巻頭をお願いした。

海外委員会

中村

●『JAPANESE ALPINE NEWS』3号、また同4号として『EAST OF THE HIMALAYAS』の発刊案内があった。

●ハリッシュ・カパディア氏(ヒマラヤンジャーナル編集長で日印合同東カラコルム踏査・パドマナム登山隊総隊長)がイギリス王立地理学会よりゴールドメダルを授与された。アジア人として125年ぶりの快挙。

●ネパールゴルカ県観光省より、5月9日に「マナスルの日」のお祝いを行い「Gorkha Tourism」の特集号を組むとの案内、協力依頼があった。(別添資料あり)

自然保護委員会

河西

2003年度自然保護全国集会を10月12日(日)、13日(月)下呂温泉で開催する。テーマは「環境保全と登山のあり方を考える」。

事業委員会

朴元

所用で一時帰国した朴元隊長よりお礼と報告が以下のとおりあった。カングリ・シャルシニア登山隊11名(平均年齢61歳)は、4月15日日本を出発した。高度順応がうまくいかない隊員もでたり、C2へのルート工作が困難を極め、5月7日撤退を決めた。14日より帰路につく予定。

山研運営委員会

小川

●外部周り修繕を5月26日より6月24日の予定で計画している。

●当会同好会「山の自然学研究会」より環境省国立公園課宛てに「上高地地域における観光事業の実態について」とタイトルされた調査依頼がきているがどういふことか、と上高地自然保護事務所の担当官が聞いてきた。何も聞いて

いないので戸惑ってしまった。当会としての姿勢を明確にしておく必要があるのではないか(自然保護委員会も知らない)。当会の名前で動く場合、いままでも各人良識の範囲であったが今後早急に検討する必要がある。総務、自然保護、山研運営の各委員会として同好会も含め行おう。

青年部

松原

「きりぎりす」9、10号(2003 Spring)を発刊した。

9 その他

●4月19日の評議員会で、中尾評議員が辞任の意向を伝えられたが、

理事会としては当人を推薦することです承した。

●大塚体制で最後の理事会のこともあり、全員が感想を述べ合った。最後大塚会長より、「理事会はサーバントであるとの考え方のもとやってきた。若年者登山の活性化、海外へのジャーナル発信、参加型自然保護活動をして100周年に向けての土台づくりがなんとか達成できた。今後引き続きたい」。そして最後に「フルマソンを、今までの9回に加えこれから10回目として11、12回と目指したい」と挨拶があった。

「山の本」新刊発売中!!

関西の沢登り(1) 台 高 の 沢

樋上嘉秀 著 四六判 230頁 本体1,900円

台高山系の谷は水量も豊富、数十米の大滝をいくつも架けて豪快。32谷を厳選して詳細地図付きで紹介。

鈴鹿の山を歩く

草川啓三 著 四六判 330頁 本体2,500円

全山約85のプロフィールとガイド。珠玉の尾根歩きコース20を紹介。カラーフォトエッセイなど、盛沢山な内容。

●好評発売中

全世界紀行—民族と歴史、そして冒険

南里章二 著 (9364) A5判 480頁 本体2,700円

シルクロード、ヒマラヤの踏査。コンゴ、アマゾン川下り。サハラ砂漠縦横断など、世界全独立国192カ国を旅して。

カラコルム・ヒンズークシュ登山地図

〔付〕カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究

A4変型判 上製美装ケース入 385ページ B全判地図13葉

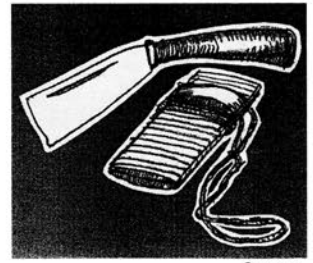
宮森常雄(秩父宮記念山岳賞受賞)・雁部貞夫 共著

◎好評発売中!! 定価(本体33,000円+税)

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel.075-751-1211 Fax.075-751-2665
URL http://www.nakanishiya.co.jp/

INFORMATION



イラスト・宇都木慎一

◆ビールパーティー 総務委員会

日時 9月5日(金)19時～21時
場所 日本山岳会ルーム
会費 2000円

申込み 8月22日(金)までに電話・FAX・メールで事務局へ

◆「上高地のタベ」へのお誘い 山の自然学研究会

ミニトークをスタートして8年目。今年も16名の仲間が上高地の夕べに毎晩彩りを添えます。

日程 8月1(金)～17日(日)
時間 19時半～約1時間
場所 ・上高地温泉ホテル
・アルペンホテル(村営)
・西糸屋山荘

話題

上高地誕生の歴史・自然(山景観、石、氷河地形、植物、花、鳥、魚、昆虫、等)などに関する興味ある話。

問合せ 古田寛昭(TEL・FAX 042

—949—5631—

*ご都合のよいホテルへのお立ちよりをお待ちしています。

◆冬期ローツェ南壁登山隊2003壮行会 東海支部

創立100周年記念事業登山の壮行会を開催します。
日時 8月23日(土)18時～

場所 名古屋・栄カスピル4F(松坂屋本店北隣)

会費 3000円
申込み 8月8日(金)までに会員番号、住所、氏名を明記しFAXかメールで東海支部宛

(FAX 052-322-7924・room1@muse.ocn.ne.jp)

*申込者には詳細を送付します。

◆立山縦走内蔵助カール研修山行 山の自然学研究会

立山連峰の縦走を楽しむ、内蔵助カールで化石氷体(2000年前の水河?)を見学。山崎、剣、真砂沢、御前沢カールなど氷河地形のオンパレードです。

期日 8月29(金)～31日(日)

集合 29日富山地鉄富山駅前
行程 富山—室堂—別山乗越—内蔵助山荘(泊)—内蔵助平—内蔵助山荘(泊)—大汝山—

雄山—一ノ越—室堂—富山

費用 実費2万円(資料配付・宿泊代)

定員 8名まで

同行 し末松日出男、SL船橋明
保険 山岳保険に加入のこと

申込み 8月10日までにFAXで船橋明まで(FAX 1467-32-3011)

*健脚向。申込者に詳細連絡のため、FAX番号併記のこと

◆山研プチ・オータムコンサート 「チロル音楽とワインのタベ」 山研運営委員会

秋の一夜の恒例ホームパーティー。プロとして活躍しているチロル音楽のアンサンブル「ヤーガハイル」を今年も迎えてアルプスの民族音楽とヨーデルを、ワインを酌み交わしながら楽しみましょう。

日時 9月20日(土)19時開催予定
会場 上高地山研

会費 12000円(1泊2食、参加費、ワイン付き)

申込み 9月10までに住所、氏名、会員番号、電話を明記し、FAXで山研へ(TEL 026-3-95-2533 FAX 0263-95-2635)

◆研究報告書購読会員募集

山の自然学研究会

資料の受入れ

次の資料を寄贈いただき、資料・映像委員会として受入れました。

品名 懸垂下降器12ヶ・ディセンダー・コレクション(堀田浩司氏遺品)

寄贈者 堀田静子様(山川三千雄会員〈会員番号6980〉に仲介いただきました)

受入日 平成15年6月16日

資料・映像委員会 鈴木 敬吾

当会は山の自然保護を科学的に進める活動を心がけています。その一環として行っている研究報告書『やまの自然』を発刊。会員の皆さまもぜひお読みください。

書名 『やまの自然』第2号
編集 『やまの自然』編集委員

内容 個人研究テーマ(上高地誕生の歴史、登山道荒廃度調査、植物の生き残り戦略など)、研修山行報告他。第2号は103頁、うちカラー1刷り24頁(A4版)
会費 2000円(送料込、本書到着後振込、原則として年

1 回発行

申込み FAXで船橋明宛(04

67-32-3011)

*今回第2号から購読希望の方には創刊号『上高地インタープリター特集』を無料進呈(先着20名)。

◆上高地山研で懇親会 休山会

同期会として「ジャック93会」が発足して10年。新しい同好会「休山会」の発足を記念し、上高地の山研で懇親会を企画しました。前後の山行は各自で計画してください。

期日 9月27(土)~28(日)

集合 9月27日15時に山研

解散 9月28日10時

費用 9000円(宿泊・懇親会)

申込み 8月20日までに住所・氏

名・会員番号・連絡先・電話を明記しFAXかE・M

AILで本田榮三郎宛(0

45-845-3041

ehonda@nifty.com)

■会員異動

物故

坂上秀太郎 (4271)	02.12.3
遠田 栄 (9461)	03.1.28
一志 幸夫 (8508)	03.4.23
大川 清二 (4775)	03.5.10
小浜 浩三 (5381)	03.5.16

佐々 保雄 (969)	03.5.16
退会	
川島 禮一 (4444)	静岡
松田 順子 (4619)	
松平 直寿 (5006)	
濱田 文二 (5148)	富山
濱川 文子 (5739)	
本多 夏生 (6306)	東九州
福戸 重隆 (7046)	岐阜
羽賀 正 (7466)	北海道
聖生 清重 (7637)	
坂本 美弥 (7690)	北海道
澤入 保忠 (7913)	
原田 藤雄 (8335)	岩手
宿輪 浩一 (8419)	
夏川 学 (8778)	
佐々木喜一 (9020)	
橋本 博之 (9155)	
前田 昌司 (9527)	関西
田原 宏史 (9560)	
中村 誓紀 (9564)	熊本
中田 徹 (9585)	関西
平林 秀雄 (9837)	
立川 葉子 (9915)	
加藤をの江 (10771)	
中川貞志郎 (11026)	
小河美奈子 (11072)	京都
斉藤 興一 (11368)	
中 美知代 (11616)	北九州
中畑 和夫 (11663)	北海道

日高チエコ (12063)	宮崎
稲葉 英樹 (12157)	富山
木鎌耕一郎 (12321)	東海
脇元 裕嗣 (12525)	宮崎
前田 為康 (13367)	関西
廣吉 賢二 (13451)	広島
服部 一男 (13503)	東海
木村 セヌ (13543)	北九州
改姓	
三輪 克子 (12722)	↓ 渋谷
終身会員	
中村 義 (4974)	
小澤 武鷹 (5665)	

ルーム日誌

5月	総務委員会 アルパインス
6日	ケッチクラブ
7日	山岳地理クラブ 02同期会
8日	青年部 山の自然学研究会
9日	自然保護連絡会 フォトビ
	デオクラブ
12日	総務委員会 アルパインス
	キークラブ
13日	常務理事会 学生部 アル
	パインスケッチクラブ
14日	理事会 つくも会 休山会
15日	科学委員会
19日	資料委員会 インターネッ

日本山岳会報 山 698号

2003年(平成15年)7月20日発行
 発行所 社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビュウハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 大塚博美
 編集人 今村千秋
 Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社

■訂正

6月(697)号3ページ4段
 14行、平成15・16年度理事の田村
 俊介氏の担当は図書と海外でした。
 お詫びして追加します。

20日	ト小委員会
	財務委員会 百年史委員会
	青年部 アルパインスキー
	クラブ 00同期会
21日	臨時常務理事会 山研運営
	委員会 三水会
23日	科学委員会 緑爽会
26日	フォトビデオクラブ
27日	自然保護委員会 九五会
	山遊会
28日	図書委員会 アルパインス
	キークラブ
29日	事業委員会 97同期会
	5月来室者582人